

2015年『夜の寢覚』現代語訳

をばすてやま

さすがに姨捨山の月は、

そうはいつでもやはり、(月の名所)姨捨山(のように風情のある広沢)の月は(私の心を慰めかねるが)、

い

夜更くるままに澄みまざるを、めづらしく、

夜が更ける

につれて

清らかな明るさが増すのを、

(女君は)素晴らしい(とお思ひになり)、

つくづく見いだしたまひて、ながめいりたまふ。

しみじみと

屋内からご覧になって、

すっかりもの思ひにふけなざる。

ア
ありしにもあらずうき世にすむ月の

以前(の境遇)とも違って、

(私は)つらいこの世に住んでいる。(しかし)澄んでいる月の

影こそ見しにかはらざりけれ

光は(以前に)見たのと比べて、変わらないなあ。

そのままに手ふれたまはざりける箏の琴ひきよせ

(女君は)久しくそのまま、手を触れなさらなかった

箏の琴を

引き寄せ

たまひて、かき鳴らしたまふに、所からあはれ

なさて、

弾き鳴らし

なさると、

場所柄から

しみじみとした情趣が

まさり、松風もいと吹きあはせたるに、そそのかされ

まさり、

松風もとても(素晴らしく琴と)合わせて吹いているので、

その気にさせられて、

て、ものあはれに思さるるままに、

おぼ

自然としみじみと心動くようにお思ひになるのにまかせて、

聞く人あらじと思せば心やすく、手のかぎり弾き

「(この演奏を)聞く人もいないだろう」とお思ひになると安心して、

琴の弾き方(の手法)を出し尽くして

たまひたるに、

弾きなさていてと、

入道殿の、仏の御前におはしけるに、聞きたまひて、

(父)入道殿が、

仏壇の前に

いらつしやったときに、

(女君の演奏を)聞きなさて

「あはれに、言ふにもあまる御琴の音かな」と、
ね
「しみじみと心を動かされる、言葉では言い尽くせない(ほど美しい)女君の琴の音色だなあ」と、

うつくしきに、聞きあまりて、イ行ひさして

美しさに、(その場で)聞いて(いるだけでは)いられないほど(度)が過ぎて、仏道修行を途中でやめて

わたりたまひたれば、弾きやみたまひぬるを、

(女君の元にお越しになったので、(女君が)演奏を止めてしまいなさったのを、(入道は女君に)

「なほあそばせ。念仏しはべるに、『極楽の迎へちかき
『まだ(止めずに)お弾きください。念仏を唱えておりますと、

『極楽浄土への迎えが 近いのか』

か』と、心ときめきせられて、たづねまうで来つるぞ
と(不安で)胸がどきどきして、
捜し求めて 参上したのだよ」

わごん

や」とて、少将に和琴たまはせ、琴かき合せなど
と言って、 少将「(女君の乳母の娘)に和琴をお与えになり、 琴の合奏などを

したまひて遊びたまふ程に、はかなく夜もあけぬ。
なやって 管絃の遊びをなさるうちに、
あつけなくも 夜も明けてしまった。

かやうに心なぐさめつつ、あかし暮らしたまふ。
このように 繰り返し心を慰めて、
日々を過ぎしなせる。

しぐれ

つねよりも時雨あかしたるつとめて、大納言殿
いつもよりも 時雨が降って夜が明けた
早朝に、 男君

より、
から、

うつられれど思ひやるかな山里の

(あなたは私に)冷淡だけれども、(私はあなたに)思いを馳せることだなあ。山里の

よは

夜半のしぐれの音はいかにと

夜中の

時雨の

音はどのようなかと思つて。

おと

雪かき暮らしたる日、思ひいでなきふるさとの空
雪で辺りが暗くなっている日、
(良い)思い出がない
故郷「(京都)の空

さへ、とぢたる心地して、さすがに心ぼそければ、
までも、(雪で)閉じている気がして、
そうはいつでもやはり不安なので、

はし

端ちかくみざりいでて、白き御衣どもあまた、
縁側近くに
膝行して出てきて、
白い御衣を
たくさん(重ね着していて)、

エ
なかなかいろいろならむよりもをかしく、なつかし
様々(な色の重ね着)よりもかえって
趣深く、
ことさら心惹かれる

げに着なしたまひて、ながめ暮らしたまふ。
感じにお召しになって、
もの思いにふけてお暮しになる。

ひととせ、かやうなりしに、大納言の上と端ちかく
昨年、
このように(大雪に)なった時に、(姉である)大納言の上と
縁側近くで、

て、雪山つくらせて見しほどなど、思しいづるに、
雪山を造らせて
(一緒に)見た時のことなどを、思いつくと、

つねよりも落つる涙を、らうたげに拭ひかくして、
いつもよりも
こぼれる涙を、
可愛い様子で
拭って 隠して、

「思ひではあらしの山になぐさまで
(都に良い)思ひ出はないだろうに、嵐山(の近くの広沢)で(も)気持ちはずれないで、

オ
雪ふるさとはなほぞこひしき
雪が降る故郷の都は、
やはり
恋しい。

我をば、かくも思いでじかし」と、推しはかり
(姉は)私を
このようにも 思ひ出されないでしょうよ」と、
お
推測する

ごとにさへ止めがたきを、
こと
までも (涙を)止めるのが難しい(様子な)のを、(女君の母親代わりの)

対の君^力いと心ぐるしく見たてまつりて、
対の君は
とても
気の毒に
見申し上げて、

「くるしく、いままでながめさせたまふかな。
「つらい(状態で)、
今まで
もの思いにふけていらっしやるなあ。

御前に人々参りたまへ」など、

女君の前に

皆さん、

参上なさってください」など、

(女君を元気づけるために、)

キ
よろづ思ひいれず顔にもてなし、

何事につけても

深刻に考えない

様子に

振舞って、

なぐさめたてまつる。

慰め

申し上げる。